

ウォーミングアップ *Getting Warmed Up by BOS*

原作／BOS

「ちよっと、なに、あれ」

キティンが言った。少女たちは体育の授業を終え、シャワーを浴び、それから校庭に建つ小さなジムに入ってきたところだった。

「みんな」

ローザが少女たちに声をかけた。

「ちよっとここにしゃがんで」

ノルディック高校の一年生から三年生までの少女たちは、十六歳のキティンと十五歳のローザの背後に集まった。

「あ、あいっら知ってる」

十六歳のタミーが言った。

「サウスフィールドから来たレスリングチームだよ。うちのレスリング部と試合をするんだって。兄貴が言ってたけど、州でも指折りの強豪らしいよ」

「まじ?」

キティンは、サウスフィールドから来た筋骨逞しい少年たちが、ストレッチやウォーミングア

ツプをしているマットに向かって歩きながら言った。

「なんか、へなちよこばっかじゃん」

「おう」

サウスフィールドチームのランディが、キティンの無遠慮な台詞を咎め立てした。

「あとで試合見にこいや。この連中、めっためったにしてやるから」

ランディは屈伸運動を続けながら言った。

「ふうん。口だけは達者だね」

キティンは言いながら、彼に近寄った。

「高校のレスリングみたいな、甘ちゃんの格闘技じゃあ、あんたらだっけっこうやるかもしれないけどね、筋肉坊や。でも、あんたらがこの住人だったら、たぶん一日と無傷じゃいられないよ。あんたたち金玉ついてるんだろ？ 女の子にだって負かされちゃうだろうね」

少女たちが笑った。

少年たちはどう反応すべきかとまどっていた。彼らのコーチは階下で試合の戦術を確認しているところだった。トラブルは起こしたくない。だが、この不躰な女の子の挑発的な言動には我慢がならない。

ランディは、思わずキティンに詰め寄った。キャプテンのアルが遮った。

「やめる。後で試合があるんだ。相手になるな」

タミーがアルに歩み寄った。

「そっか。試合は大事だもんね。じゃあウォーミングアップの相手をしてあげるよ」

言うなりタミーは、いきなりアルをマットに押し倒し、両腕と両脚でアルを締めつけた。アルはもがいた。タミーは彼よりもずっと小さかったが、技がみごとに決まり、身動きができなかった。

少女たちは拍手したり歓声をあげはじめた。

「いけ！ ノルディック！」

一人の少女が叫んだ。

「金玉、潰しちまえ！」

一人の少年が応酬した。

「なあにがノルディックだ。このブルドック女！」

言い返したとたん、彼は「うっ」と呻き、股間を両手で押さえて前屈みになった。

チアリーダーのようにスタイルがよく、街娼のように度胸のいい十八歳のブロンド娘、メリッサ・グラントが、彼の股間を膝で蹴りあげたのだ。

「へたな冗談はよせよ」

メリッサは豊かな乳房を揺すって笑い、彼の両手をつかんで広げ、今度は爪先で彼の睾丸を蹴った。少年は悲鳴をあげてマットに倒れ、体を折り曲げて呻きながら悶絶した。

メリッサは彼に背を向け、はやし立てたり笑い転げる少女たちにウィンクした。

タミーは、まだもがくアルをマットに押さえつけている。

キティンがランディに向かって挑発するように言った。

「ちよつと、あんた臭いよ」

ランディはかっとなり、キティンに詰め寄って怒鳴った。

「てめえ……」

キティンは彼の唇に指をあてて黙らせ、仲間のなかでいちばん小さな少女を呼んだ。

「バニー、ドアを閉めな。パーティといこうぜ。音が外に漏れないようにね」

バニーはミニスカートをひるがえしてドアに駆け寄り、ボタンと閉めた。

「よし」

キティンはランディに言った。

「で、なにが言いたいの？ 泣き虫さん」

「……てめえなんか……」

「わっかつたよ」

キティンは笑い、いきなり膝を突き上げた。ランディは睾丸をまともに蹴られ、眼を見張って呻いた。

それを合図に、ほかの少女たちがいつせいに少年たちにとびかかった。ジーパンをはいた少女、スラックスの少女、ミニスカートの少女、スリット入りのロングスカートの少女が、「いけえ、ノルディック！」と叫びながら。

少年たちは呆然として少女たちの攻撃を浴びた。立っている少年は股間を蹴りあげられた。ヘッドロックされた少年もいた。平手打ちを浴びた少年もいた。腰にタックルされた少年もいた。

不意をつかれた少年たちは、しばらくはなされるがままだったが、やはりそこはレスリングのトレーニングをほどこされた連中、態勢を建て直して少女たちに立ち向かっていった。

小柄なバニーは靴を脱ぎ捨て、ジョニー・トップパーという彼女よりもはるかに大きな少年に襲いかかった。彼女は、ジョニーの股間に膝蹴りを浴びせ、さっとしやがみこみ、前かがみになった彼の、タイツをもつこりと盛り上げている睾丸にパンチを浴びせた。

ジョニーは苦痛のあまり、股間を両手で押さえ、床にうずくまりたかった。しかし、それでは男の沽券にかかわる。彼は戦いつづけようとした。

だが、彼には反撃する力は残っていなかった。バニーはジョニーの背後に回り、脚をつかんでうつ伏せに押し倒した。彼の背中にのしかかり、左腕を腹部に巻き付け、右手で睾丸をつかんで思い切りひねりあげた。

ジョニーは絶叫した。

「やめろ！ この汚い雌犬 (dirty bitch) ！」

パニーは立ち上がり、片手で睾丸を、片手で腹部をつかみ、彼を持ち上げはじめた。彼の両腕はだらりと垂れ下がり、爪先がやっとマットにつくくらいまで持ち上げられた。

ジョニーが顔を苦痛に歪め、手脚を虚しくばたつかせているのを、パニーはにやにやしながら眺めていたが、やがて両手を離れた。ジョニーはうつ伏せにマットに叩きつけられた。ジョニーは、彼女の足元で体を折り曲げ、悶絶した。

「もう終わり？」

パニーは、爪先で彼の肋骨を蹴りつけながら、あざ笑った。

「男の子って、レスリングが大好きだと思ってたけどね」

キュートなタミーは、七〇キロもあるアルを組み敷いたままだった。彼女は、アルの腹部を両脚で挟みつけ、腕をねじあげていた。そして、片足の踵でアルの股間を撫でていた。

痛くはなかったが、アルはまったく彼女の「愛撫」から逃れられずにいた。彼は身を振り、激しく抵抗したが、タミーのホールドは、高校のレスリング部では習ったことのないものだった。

タミーはあざ笑い、彼の耳に軽く噛みつきながら言った。

「ねえキャプテン、はやくレスリングしようよ！」

言うなり、タミーは彼を仰向けにし、思い切り踵を股間に打ち込んだ。

アルは苦痛のあまり絶叫した。タミーは容赦なく、再び彼をうつ伏せに倒し、フル・ネルソンを仕掛けた。

長身のメリッサは、金髪をなびかせ、豊かに実った乳房を揺らしながら、サウスフィールドチームでいちばん小柄な少年であるティム・ジョンソンを翻弄した。

メリッサよりもチビのティムは、彼女が繰り出すキックに脅え、何もできずにいた。フェイントをかけるとびくっと身を強張らせ、思い切って立ち向かっていくと、股間蹴りを浴びた。

「どしたの〜？」

メリッサはあざ笑った。ティムは、どうやら目の前のグラマラスな十八歳の少女を押し倒してホールドすることだけを考えているようだった。メリッサはそれを見抜いていた。彼女は突っ立ったまま彼を挑発し、飛び掛かってくると股間を蹴ったり、殴ったりし、彼がうずくまると飛びのいて、余裕をもって彼を見下すことができた。

もはや、ティムはどうしていいか分からず、顔じゅうに焦りを浮かべていた。

「おいで、ティミー！」

メリッサは、ティムを真似て、両手で股間をかばった。

「坊や、こっちよ」

まるで五才の子供に話しかけるような調子で挑発し、げらげら笑った。

そのとき、背後から別の少年が彼女に襲いかかった。メリッサに睾丸を蹴りあげられてうずくまっていた少年が、やっと持ち直して攻撃を仕掛けてきたのだ。それを見たティムは、メリッサにつかみかかった。

メリッサは咄嗟に、ティムの睾丸にアッパーカットを食わせた。ティムは悲鳴をあげ、両手で股間を押さえてうずくまり、悶絶した。

メリッサは踵を返し、背後からの襲撃者と組み合った。二人はもつれあつてマットに倒れた。

少年は、メリッサを押さえつけ、彼女の腹部にまたがった。

「汚ねえ手を使いやがって。こっちも容赦しねえぞ！」

言うなり彼は、メリッサの乳房をぎゅつとつかんだ。メリッサは苦痛に呻きながらも、人さし指と中指でV字を作り、少年の眼を突いた。少年は顔を覆って呻き、腰を浮かせた。すかさずメリッサは、その股間を膝で蹴りあげた。

少年は悲鳴をあげて横倒しに倒れ、両手で股間を押さえて悶絶した。

メリッサは彼の傍らに膝立ちになり、乱れた髪の毛を直しながら言った。

「ノルディックの女の子の恐ろしさを教えてあげる。このインポ野郎！」

彼女は、少年の両足をつかみ、マットに転がって悶絶するティムのそばにひきずった。そして、二人の股間を両手で同時につかみ、睾丸をひねりあげた。

十五歳のローザは、仲間たちのなかでもっとも意地悪で、もっともタフな女の子だった。ちょっと太めの彼女は、少年たちをかき分け、いちばん太つたのを探した。

はたして、明らかに太りすぎの大柄な少年がいた。

「いた~~~~っ!!」

ローザは興奮した。太つた少年は困惑した。

「くらえ、このデブ！」

ローザは言うなり、少年の睾丸を蹴りあげた。少年は体を折り曲げた。ローザは彼にヘッドロックを食わせ、マットに叩きつけた。少年は蛙のように仰向けに倒れた。ローザは、その股間を爪先で蹴りつけた。

ローザは少年の傍らに膝立ちになり、股間を押さえて悶絶する少年の両手を払いのけ、睾丸をつかんでひねりあげた。

太つた少年は絶叫した。この日、ジムに鳴り響いた悲鳴のなかでもっとも悲痛で大きな声だった。彼は、ローザの手や髪の毛、洋服、脚、くるぶしをひっかいて抵抗したが、ローザはますます強く睾丸をひねりあげた。少年は逃れる術もなく悶絶した。

こんな場面が数多く展開された。

たとえば、セレスティンという少女は、一人の少年の股間を蹴りあげた。しばらく呻いていた

彼が立ち直って、仕返しに襲いかかってくると、別の小柄な少年の背後に逃げ込んだ。

「こつちだよ」

彼女は、小柄な少年の睾丸を背後から掴み、苦悶する彼の顔の横からひよいと顔を出して、敵をからかった。

「何してんの？ はやく来なよ」

セレスティンは、小柄な少年を楯に逃げ回った。しばらく相手をからかった後、小柄な少年を思い切り突き飛ばした。

二人の少年は正面衝突し、おでこをぶつけ合ってふらふらになった。セレスティンは、左手で小柄な少年の睾丸を、右手でもう一人の睾丸をつかみ、涙を流しながら悲鳴をあげて悶絶する二人を、あちこちに引つ張り回した。

かくしてサウスフィールドチームのレスラーたちはことごとく、想像を絶する激痛に苦悶し、悲鳴をあげ、ノルディックの少女たちに許しを乞うた。

「やめて……、やめてええええ！」

「た……の……む……」

「つ、潰さないでくれええ！」

「き、君らの勝ちだ……あ、謝る……」

もはや、少年たちは戦意を喪失していた。キティンが叫んだ。

「よおし、離してやんな！」

少女たちは、少年たちを開放した。ジムは、両手で股間を押さえ、マットに転がって痙攣する少年たちの号泣で満たされた。

「どうする？」

少女たちは、屈辱感と激痛にまみれたレスラーたちを見下ろし、嘲笑いながら相談した。

「脱がせちやおうか？」

ローザが提案した。

「面白い、やろう、やろう」

少女たちはいっせいに作業にとりかかった。

少年たちの体は、躍起になって複雑なレスリングのユニフォームを脱がせようとする少女たちによって、転がされ、裏返しにされ、引きずられた。

パニーは、息も絶え絶えで転がっていたジョニー・トッパーを無理やり立たせ、背後から睾丸を掴み、全身の力をこめてひねりあげた。ジョニーは絶叫した。パニーは、右手で睾丸を掴んだまま、左腕を彼の首に巻き付けてロックし、強く締めあげ、ジムの窓に向かって歩きだした。ジョニーは、彼女に従うしかなかった。

パニーは、窓の前に彼を立たせ、それから今度は左腕を首からはずし、両手で睾丸をひねりあ

げた。ジョニーは前屈みになり、開かれた窓から半ば上半身を突き出して、もがき苦しんだ。

「もつと前かがみになって！」

バニーは左手を睾丸から外し、ジョニーの髪の毛をつかんで無理やり、彼の上半身を完全に外に突き出して、腹部を下の窓枠に押し当てた。それから、思い切り窓を閉めた。

哀れジョニーは、上半身を外に突き出したまま、窓に固定された。

バニーは、ジョニーのパンツを脱がせた。剥き出しの尻が室内の女の子たちの眼にさらされた。女の子たちは、ジョニーの尻を指さして喝采し、哄笑した。バニーは彼女たちに手を振り、シューズやストッキングまで脱がせてしまった。しまいには、ボールペンをバッグから取り出し、彼の肛門に突き立てた。

ほかの少女たちも負けじと、さまざまなやり方で、少年たちを全裸にした。その過程で、多くの少年が再び睾丸を傷めつけられ、肛門にボールペンやモップを押し込まれる羽目に陥った。

数分後、少年たちはすべて全裸にされ、両手で赤黒く腫れ上がった陰囊や、血がしたたる肛門を押さえて床に転がっていた。もはや、絶叫する力も、泣きわめく力も彼らには残されていなかった。かすかなうめき声と、嗚咽、そして、ジムを出てゆくノルディックの少女たちの賑やかなお喋りだけが聞こえていた。

少女たちは立ち去った。少年たちが身につけていたものを全て持ち去って……。

「試合、がんばってね」

一人の少女が、ドアから出る際に、サウスフィールドのレスラーたちに声をかけた。